

やさしい人大きくせん



「おもたあい」
 そうじの時間、わたしは水の入ったおもいバケツを一人ではこびながら、
 心の中でぶつぶつ言っていました。
 (だれも手つだつてくれなくて、わたしだけが……)
 と、はらが立っていました。わたしは、顔
 もおこっていました。みんなに会ったら、
 「おもいんだから、いっしょにもつてよ。」
 と、ぜったい言おうと思っていました。
 でも、そのとき、
 「一人でおもたたくない？ いっしょにもと
 う。どこまで？」
 と、やさしい声がありました。そして、その
 人はざつと手を出してバケツをもつてくれ
 ました。バケツは一気にかかるようになりました。

「えっ、だれ？ なんて、やさしいの。」
 それは、みほさんという六年生でした。さつきまでおこっていたわたしの
 顔が、にこにこ顔になりました。
 わたしは、このときから「やさしい人大きくせん」を考え、じつこうする
 ことにしました。そのさくせんというのは、「こまっている人を見かけたら、
 こんどは自分がたすけるぞ。」というものです。
 さくせんを考えてから、さつそくおもそうなものを
 もった人を見かけました。でも、声が出てきません。
 (まよってしないで、声をかけるんだ。)
 と心の中で自分をげましているうちに、その人は通り
 すぎてしまいました。わたしは、しょんぼりして教室に
 帰りました。
 (わたしにはむりなのかな。でも……)
 それから、何日かたって、とうとう「やさしい人大き
 くせん」をじつこうするチャンスがやってきました。その日はお楽しみきゅ
 うしよく会だったので、おぼんや食きをかえすがいちどにおおせい来て、



きゅうしよく委員会の六年生がたいへんそ
 うです。
 「お手つだいします。」
 ということばと同時に、わたしの手は、おぼ
 んにとどいていました。かたづけがおわって、
 「ありがとう。たすかったわ。」
 と、六年生に言われました。
 (やったあ。「やさしい人大きくせん」大せ
 いこう。こんなにハッピーになれるんだ。)
 とうれしくなりました。
 これからは、このさくせんがどんどんでき
 そうです。



「やさしい人大きくせん」が大せいこうした
 りゆうを覚えてみましょう。

あなたが、「やさしい人大きくせん」をするこ
 したら、どんなことをしようと思えますか。



3 ヌチヌグスージ(いのちのまつり)

この島のお日さまは、まだ春なのに、まなつのようにかがやいています。空にむかってほこらしげにえだをのびているのは、デイゴの木。今年もまつかな花をつけました。

おもしろい形をした石のおうちの前で、おおぜいの人たちがおべんとうを広げて、楽しそうにおしゃべりをしています。男の人が三線をひきはじめました。それに合わせて歌いだす人がいます。一人、二人とおどりだし、大にぎわいとなりました。

さつきから、まんまるな目でそのようすを見ているのは、はじめてこの島にやってきたコウちゃんです。近づいてきた島のおばあさんにたずねました。

「みんなて、なにしているの？」¹⁰

「わたしたちにいのちをくれた、だいじなご先祖さまのおはかまいりさあ。」

「おはかまいり？」

コウちゃんがおうちと想っていたのは、島どくどくのおはかでした。島では、春になると観せきがあつまってきて、ご先祖さまに「ありがとう」をつたえるのである。



* (三線) 三本け
ん(三)をひいて
音を鳴らす。

す。びつくりしているコウちゃんに、こんどはおばあさんがたずねました。

「ぼうやにいのちをくれた人は、だれねえ？」

「それは……お父さんとお母さん？」

「そうだねえ。いのちをくれた人をご先祖さまというんだよ。」

「お父さんとお母さんって、ぼくのご先祖さまなの？」¹¹

「お父さんとお母さんに、いのちをくれた人がいなければ、ぼうやは生まれてないさあね。」

コウちゃんの頭の中に、四人のおじいちゃん、おばあちゃんの顔がうかんできました。¹⁰

「おじいちゃん、おばあちゃんも、ぼくのご先祖さまだね。」

コウちゃんは、ときどきやさいをおくってくれる、ひいおばあちゃんのことを思い出しました。小さな体で、はたけしことにせいを出しています。

コウちゃんは、ひいおばあちゃんが見せてくれた、およめ入りのときの古いしんを思い出しました。コウちゃんが生まれたときにはもういなかった、ひいおじいちゃん、ひいひいおじいちゃんや、ひいひいおばあちゃんがつっていました。

「ぼくのご先祖さまって、何人いるの？」



コウちゃんは、ゆびをおって数えてみることにしました。

「ぼくにいのちをくれた人、二人。」

「お父さんとお母さんに、いのちをくれた人、四人。」

「おじいちゃんとおばあちゃんに、いのちをくれた人、十六人。」⁵

「ひいおじいちゃんといいおばあちゃんに、いのちをくれた人、十六人。」

「そのまた上に、三十二人。そのまた上に……。もう数えられないよ。」

「ずっとずっと、うちゅうのはじまりから、いのちはつづいてきたから、数えきれないご先祖さまのだけ一人かけても、ぼうやは生まれてこなかった、ということさあ。だから、ぼうやのいのちは、」

「ご先祖さまのいのちでもあるわけさあね。」¹⁰

コウちゃんは、なんだかふしぎな気持ちがしてきました。

「ぼうやも大きくなってけっこんして、子どもが生まれるさあね。またその子どもが大きくなって、けっこんして子どもが生まれる。いのちは目には見えないけれど、ずっとずっとつながっていくのさあ。」

「ぼくのいのちって、すごいだね。」

「あ、ぼくのご先祖さまだ。」

お父さんとお母さんがやってきました。

「あ、ぼくのご先祖さまだ。」

いつもの間にか、お日さまは金色の海に

しずもうとしています。

コウちゃんは、空にむかって高く高く、手をふりま

した。そして大きな声で言いました。

「いのちをありがとう！」



「コウちゃん、さがしたぞ。」

お父さんとお母さんがやってきました。

「あ、ぼくのご先祖さまだ。」

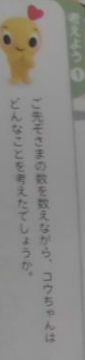
いつもの間にか、お日さまは金色の海に

しずもうとしています。

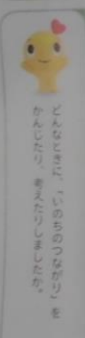
コウちゃんは、空にむかって高く高く、手をふりま

した。そして大きな声で言いました。

「いのちをありがとう！」



「いのちをありがとう！」



「いのちをありがとう！」



「ゆうすけ、そろそろ九時よ。ゲームは、おわりにしなさい。」
 「う、うん。あともう少し。」
 「いいかげんにしなさい。あしたの学校のしたくもまだやらないでしょ。」
 お母さんに強く言われ、ゆうすけはしぶしぶゲームをやめて、自分のへやに行きました。それでもゆうすけの頭の中は、ゲームのことでいっぱいです。
 「ああ、たぶん、けんたさんは、さいごまでクリアしちゃったろうなあ。あつ、そうだ！」¹⁰

ゆうすけはへやの電気をけすと、ベッドの中でこっそりつづきをやりはじめました。時間は、どんどんすぎていきます。十二時近くになったとき、ゆうすけはいつの間にか、ねむってしまいました。

「ゆうすけ、いいかげんにおきなさい。」
 お母さんの大きな声で、ゆうすけはやつと目をさました。時計を見ると、いつも家を出ている時こくです。
 「どうして、もっと早くおこしてくれなかったの。」
 「なに言ってるの。お母さんは、なんどもおこしたわよ。」⁵
 そんなことを言われても、ゆうすけはまったくおぼえていません。あわててきかえ、朝ごはんも食べず、顔もあらず、はもみがかず、ランドセルをもって、いそいで家を出ました。

学校のそばの大通りは、歩道きようが通学ろになっています。
 「ええい、近道だ。」¹⁰
 ゆうすけは、青しんごうが点めつしているおうだん歩道を、走ってわたりはじめました。しかし、しんごうはすぐに赤にかわり、おうだん歩道のほうにまがってきた車に、あやうくはねられそうになりました。
 「あぶないじゃないか！」¹⁵
 その車のうんでん手さんに、大きな声でしかられてしまいました。



そのあと、なんとかちこくをせずに学校にたどりつきましたが、しんごうのときどきがおさまりません。そして、教室に入り、自分のすにすわって、あたりを見回しました。すると、みんなのつくえの上には、ペットボトルがのついています。
 「あつ、しまった！ 今日けふの図画工作は、ペットボトルがいるんだつた。」
 きのお母さんによういをしてらつていたのに、ゆうすけはもつてくるのをわすれたのです。しかも、図画工作は一、二時間めです。
 しばらくすると、先生が教室にいらつしやつて、朝の会がはじまりました。しかいの日直の声も、友だちのニュースのはつびようも、先生のお話も、ゆうすけの耳にはなんにも入つてきませんでした。

朝の会のとき、耳になんにも入つてこない
 ゆうすけは、どんなことを考えていたのでしよう。

考えなよつて
 あなたが、これからの毎日の生活の中で、自らかで気をつけようと考えていることには、どんなことがありますか。